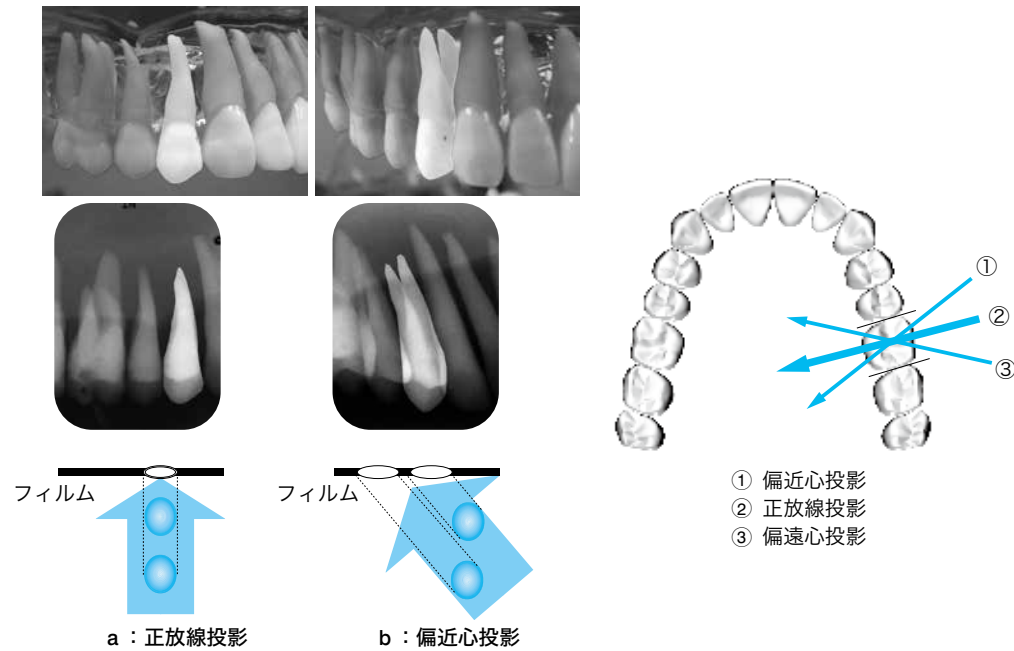


る。通常の撮影では、正放線投影が原則で、前歯から臼歯までのすべての歯で行われる(図 5-28)。

しかし、正放線投影がすべてにおいてよいとは限らない。歯によっては、正放線から投影すると歯根同士が重なることがある(図 5-29-a)。この場合、正放線ではなく、あえて近心または遠心から投影することで、それぞれの歯根をずらして写すことができる(図 5-29-b)。これを偏心投影といい、近心からの投影を偏近心投影、遠心からの投影を偏遠心投影という(図 5-29)。



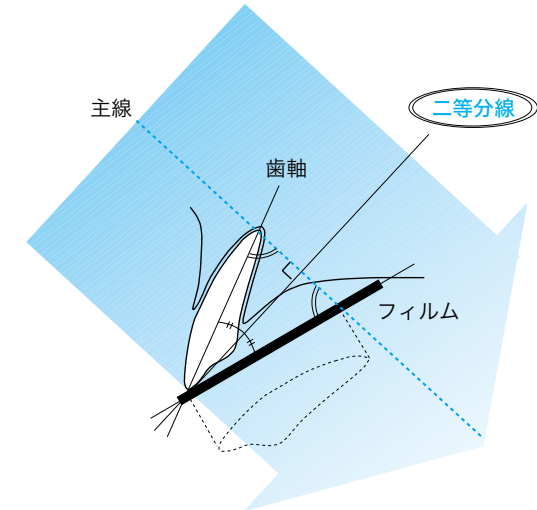
■ 図 5-29 偏心投影法 ■
歯根が重ならないようにする方法。

垂直的角度：歯の長軸(歯軸)とフィルムの間でできた角度に、仮想の二等分線を考え、この二等分線に対して垂直にエックス線の主線を根尖を通して投影する(図 5-30、ここから二等分(面)法の名前がついた)。

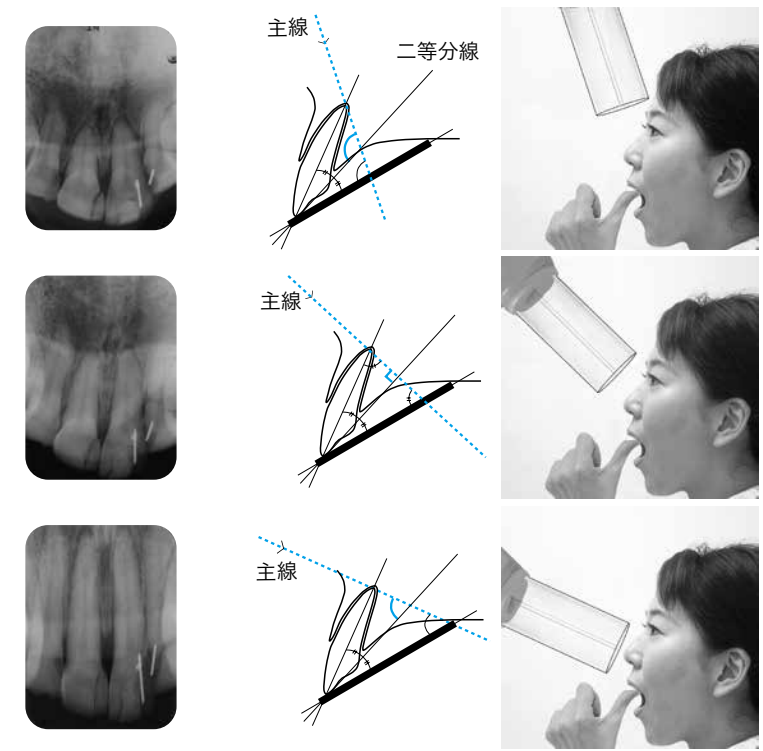
この方法により、歯軸とフィルムの上に二等辺三角形が出来上がり、歯の実長がフィルム上に再現され、ほぼ等長の画像を得ることができる。

二等分(面)法は、前歯から臼歯まですべての歯で行われる。この角度が不適切な場合、歯根長の短縮や伸張が起こるので、的確に合わせる必要がある(図 5-31)。

Point 二等分(面)法では通常、水平的角度は隣接面が重ならない正放線投影を行い、垂直的角度は二等分線に垂直になるように投影する。これにより歯と同じ長さに写すことができる。



■ 図 5-30 二等分(面)法図説 ■
歯の長軸(歯軸)とフィルムとの間にできた角度を二等分したものが二等分線である。この二等分線に対して垂直にエックス線の主線を投影する。



■ 図 5-31 二等分法長縮 ■

▶ 二等分法の撮り方としくみをみてみよう

